

■第4章 ささげる■

各地の遺跡や古墳などでは、日常生活と区別される祭祀や儀礼に関する痕跡をみることがしばしばあります。

それらの痕跡にともなって、食にかかわる資料が出土することから、古代の人びとは祭祀や儀礼においても食べるという行為を意識していたと考えられます。

実際に、弥生時代の墓から出土する土器は日常の飲食に伴う器の種類で構成されていることが分かっています。

そして、それらの土器には故意に穴の開けられたものがみられます。

土器に穴をあける行為は、再使用しない意思のあらわれとされ、祭祀や儀礼に際してあけられたのでしょう。

墓から出土したものではありませんが、今回展示している船橋遺跡の弥生土器には穴があけられたものがみられます。

古墳時代においては、小型の土師器と食べ物を模した土製品がセットになって古墳から出土する例が知られます。

これらの土製品は、当時の人びとが古墳の祭祀や儀礼に使用した食べ物を考える上で重要な資料となります。

古墳時代後期に横穴式石室が本格的に導入されるようになると、石室内には坏や高坏などの飲食に関わる須恵器が納められるようになります。

それらの須恵器の中には、壺の肩部や器台の口縁部に小像や小型の器を配置した、装飾付須恵器とよばれるものがみられます。

その特殊な形からは、日常で使用したとは考えにくく、古墳における葬送儀礼のために製作、使用されたと思われます。

いずれにしろ、様々な出土例からは、飲食という行為が古代の祭祀や儀礼において重要な役割を担っていたとみてよいでしょう。